

「歴史と地形と変遷」



「川崎」という名前が示すように、私たちのまちは川とは深いかわりがあります。その歴史をふり返る時、そばを流れている大小さまざまな川から、じつに多くの恩恵を受けてきました。そして、人々の心をつなぐ、尊い文化を生み出す舞台となってきました。今、川崎市民は川との新しい関係を考え、つくりだすべき時代を迎えているのです。

【歴史】

「川崎」の地名は弘長3年(1263)2月8日付勝福寺鐘銘によると、「武州河崎庄内勝福寺」と書かれていることから、「多摩川のさきという自然地名によるもの」とされています。

多摩川上流の多摩丘陵には、数多くの原始・古代の遺跡が分布し、渡来人のものと思われる名称、遺物も多く、川崎が古くから外部に開かれた地域であることを物語っています。

川崎が大きく変わるのは、天正18年(1590)に徳川家康が関東入国によって

市域80ヶ村が成立した時でした。幕府は安定した年貢徴収のため、小泉次太夫に二ヶ領用水の開削を命じ、14年の歳月をかけて完成させました。稲毛、川崎領60カ村を潤したこの用水が今日の細長い市域を形づくったのです。

元和9年(1623)、東海道の川崎宿を置き、この宿場はほかの村々とはことなり、町人や職人が定住し、川崎が都市を形成する母体となりました。

明治になると宿場は廃止され、明治5年(1872)には品川～横浜間に鉄道が開通し、川崎駅が誕生しました。

大正13年7月1日には、川崎町・大師

町・御幸村の2町1村が合併して川崎市となりました。その後、昭和14年まで6回にわたる11町村の編入で、現在の市域が形づくられたのです。京浜工業地帯の中心として繁栄した川崎市は、第2次世界大戦で壊滅的な打撃を受けますが、戦後いち早く復興し、昭和35年ごろからは北部の丘陵開発によって人口増加が続きました。

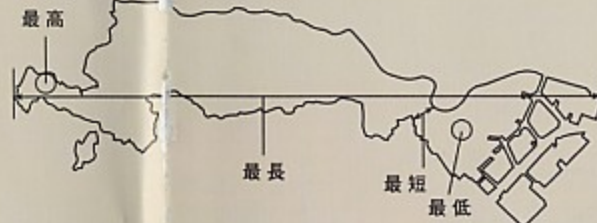
昭和47年には人口100万人を目前に政令指定都市に昇格し、川崎、幸、中原、高津、多摩の5区でスタート。昭和57年には宮前区と麻生区が誕生し、7区の行政区画に再編されています。

昭和58年3月には川崎市の「基本構想2001年プラン」を発表。都市、副都心の整備が進められました。さらに平成5年3月に21世紀を展望した都市づくりの羅針盤となる「川崎新時代2010プラン」第一次計画を発表、3年ごとの見直しにより、平成8年に第二次中期計画を発表して、推進しています。平成からは特に福祉と魅力あるまちづくりを目指して、川崎市のイメージアップにも努め、さまざまな文化施設も次々とオープンさせ、文化国際交流にも力を入れています。

行政区域図



- 面積：144.35km²
- 最長距離：32.42km
- 最短距離：1.23km
- 最も高い所：148.0m (海拔) 麻生区黒川
- 最も低い所：0.2917m (海拔) 川崎区田島町 (平成8年10月1日現在)



【地理・地形】

川崎市は、神奈川県北東部に位置し、東京都との県境となる多摩川の右岸に沿って西北の丘陵から東南の臨海部へ帯状に広がっています。西北部が標高40m程度の丘陵と谷戸につづく起伏の多い地形であるのに対し、東南部はおおむね沖積平野で、東は東京湾に面しています。

東西の最長距離は約33km、南北の最短距離が約1kmのところもあります。この地勢を舞台に川崎市は発展してきました。

【市域と人口】

大正13年7月、面積22.23km²、9,685世帯、人口50,188人で川崎市として誕生しました。その後、合併・編入を繰り返し、平成8年現在、面積144.35km²、人口120万人の都市となっています。



現在の〈六郷橋〉から

江戸時代後期(1797-1858) 広重「東海道五拾三次-川崎(六郷渡船)」
多摩川の川下・六郷川。古くは橋があったが、元禄ごろより渡船制度となり、「六郷の渡し」と呼ばれた。川向こうは川崎大師の参詣客でにぎわった川崎の宿。